

住友家の人々と泊園書院
— 『南汀遺稿』の考察を中心として—

横 山 俊一郎

Sumitomo Family and the Hakuen Shoin,
Focusing on *Nantei Ikō*

YOKOYAMA Shunichiro

This study investigates how the people of the Sumitomo family and the managers they employed, who were considered to be prominent members of the Osaka business community from early modern times to modern times, accepted the arts of the private academy called Hakuen Shoin in Osaka. It focuses on the students from Hakuen Shoin, especially Sumitomo Nantei, who was the head of a branch of Sumitomo family, in addition to Nakagawa Gyoryo and Imakita Kosen, who supported Sumitomo's initiative to combine cultural activities and human resource development. As a result of this initiative, it became clear that Hakuen Shoin supported the Sumitomo family's hobbies and spirits.

キーワード：泊園書院 (Hakuen Shoin)、住友南汀 (Sumitomo Nantei)、中川魚梁 (Nakagawa Gyoryō)、今北洪川 (Imakita Kōsen)、南汀遺稿 (*Nantei Ikō*)

はじめに

筆者はこれまで大阪の漢学塾・泊園書院の出身者、とりわけ「実業家」あるいは「名望家」と呼称された人々の意識と行動を考察することにより、明治以降の漢学と実業界との関わりを検討してきた¹⁾。近世・近代の商都大阪という見地からこの問題を考えた場合、やはり豪商・財閥としての「住友家」は見過ごしではないキーワードになるだろう。そこで本稿では、初代院主の藤澤東暎〔寛政6年(1794)―元治元年(1864)〕とその長子で第二代院主の藤澤南岳〔天保13年(1842)―大正9年(1920)〕に学んだ住友南汀^{なんてい}という人物に着目し、その著書『南汀遺稿』(川久保士龍、1900年)の内容を明らかにし、そこで得られた事実を踏まえつつ、住友家の人々と泊園書院との関係を明らかにしたい²⁾。

住友南汀〔天保11年(1840)―明治31年(1898)〕は、名は友衆、字は公道、通称は理右衛門、号は南汀³⁾。大阪の豪商住友家の分家・甚次郎家の住友友善(初代当主、一代限りで絶家)の庶子として生まれ、幕末期になると同じく住友家の分家・理右衛門家の住友友諒(五代目当主)の養子となる。理右衛門家の家祖は、住友本家の住友友信〔正保4年(1647)―宝永3年(1706)〕(三代目当主)の甥に当たる住友友久で、はじめ銅吹・酒造および出雲松江藩の蔵元を業とし、その住所は天満小島町(のち綿袋町)であった。南汀は家督相続ののち、出雲松江藩

1) 筆者のこれまでの研究成果については、拙著『泊園書院の明治維新―政策者と企業家たち―』(清文堂出版、2018年)、拙稿「山口県宇部地域における泊園書院出身者の事業活動の一考察―渡辺祐策を支えた名望家を中心に―」(『東西学術研究所紀要』第51輯、関西大学東西学術研究所、2018年、351~371頁)、同「近代岡山における泊園書院出身者の事業活動の一考察―実業家星島謹一郎・中野寿吉を中心に―」(『東西学術研究所紀要』第52輯、関西大学東西学術研究所、2019年、249~266頁)、同「近代の泊園書院と社会企業家―褒章名鑑にみる書院関係者の諸活動―」(『泊園』第58号、泊園記念会、2019年、69~126頁)を参照のこと。

2) 住友南汀を学術的に取り上げたのは、関西大学教授をつとめた故・水田紀久氏が最初で最後であると考えられる。同氏が著わした『日本篆刻史論考』(青雲堂書店、1985年)の「呉北渚の人と芸術」には、南汀の簡単な略歴(東暎に学んだことを含む)に加えて、南汀が師事した呉北渚に関する詳細が書かれている。同書は南汀の文化的素養を考えるうえで重要な指摘を含んでいる。なお、南汀が泊園門人であったことは、本稿で取り上げる『南汀遺稿』の小伝および序文のほか、全五冊から成る『登門録原稿』[LH2/丙108-1~108-5]の第三冊目に「住友理右衛門 市内南区板屋橋南畔」と記載されている事実からも確認することができる。なお、『登門録原稿』には門人の姓名の右上に漢数字で入門年が記されているが、それによると、南汀は明治6年(1873)の入門であった。後述する南岳の講義を聴講した際の記録であると考えられる。なお、LH2以下は関西大学総合図書館の請求記号である。

3) 以下の南汀とその家族・家系については、本稿で取り上げる『南汀遺稿』の小伝のほか、住友銀行行史編纂委員会編『住友銀行八十年史』(住友銀行行史編纂委員会、1979年)の第2章「江戸時代後期の住友泉屋」の章末に附載された「住友氏・蘇我氏略系図」を参照。

(松平家：18万6千石)と丹波篠山藩(青山家：6万石)の用達をつとめたが、維新期の廃藩置県をきっかけとして窮迫するにいたる。しかしその後は、住友本家の支援を受け、隠居所を拵える資金を得た。以来、郊外の天王寺村に移って世俗に関わらず、山水と詩酒を楽しむ悠々自適の余生を送る。異母弟の川久保士龍(名は鉄三)は兄南汀の三周忌に際し、その遺稿を集めて出版した。これが本稿で取り上げる『南汀遺稿』である。

『南汀遺稿』の構成および作者は次の通りである。Ⅰ「菊思蘭情」(題字：住友春翠)、Ⅱ「南汀遺稿序」(序文：藤澤南岳)、Ⅲ「題南汀住友詞伯詩卷」(題詩：緒方南湫)、Ⅳ「住友南汀小伝」(小伝：川久保士龍)、Ⅴ「南汀遺稿跋」(跋文：日柳三舟)。そしてこのⅣとⅤの間に遺稿本文が収められている。本稿では、まず南汀の人物像を概観し、その後南汀の人的・知的交流の実態にせまることを目的として、『南汀遺稿』を考察するに当たっては、Ⅳ→Ⅱ→Ⅲ→Ⅴ→遺稿本文、という順番を設定したい。

なお、上記の考察を通して得られる事実は、江戸期以来の豪商としての「住友家」、それも分家における「住友家」であり、かつ、院主が住友・泊園双方の接点になっているものが中心となる。しかし、住友家の人々と泊園書院との間には、明治期以降の財閥としての「住友家」、それも本家や雇用経営者における「住友家」があり、かつ、門人が接点になっている事例も存在する。そのため本稿では、『南汀遺稿』の考察に加えて、後者の代表例として泊園門人の中川魚梁と今北洪川を取り上げ、彼らをめぐる人的・知的交流の実態にも着目することとする。

1 住友南汀小伝

本章では、川久保士龍によるⅣ「住友南汀小伝」の分析を通して、南汀の人物像を概観したい。とりわけ注目したのは、その修学・職業・趣味・交友面についてである。

家兄名友衆。字公道。通称理右衛門。南汀其号。浪華住友氏同族也。天保十一年四月四日生。①父友善好和歌及書画。以風流自居焉。友衆受父遺風亦好文墨。及長隨藤澤東畷修儒学。又就呉北渚学書法。有所并得。性温厚寡言。不干名利。超然拔俗。有故不継父家。出承同族友諒之後。為雲州藩及青山藩用達。②維新廢藩後。世態一變。家道頓衰。然未嘗以風塵傷雅懷。簞瓢屢空意晏如也。頼有宗家恩賜。以得為菟裘之資。爾來卜居於天王寺村。不関世務。悠々自適。以山水詩酒相娛。此間三年三処移家。恰如東坡挾勝亭是也。③嘗与同人相謀。起由予吟社。蓋有振興浪華文物之意也。明治三十一年十一月四日病歿。享年五十九。葬于久本寺之塋域。④畏友日柳三舟。有挽詩云。城南晦跡世無求。閑澹生涯在首邱。籬菊猶存身後影。畦蔬今作仏前羞。淵明止酒病成崇。杜老於詩死始休。一事臨終有佳話。

恍呼侍婢試賡酬。足以詳其平生之跡。故録以為逸事一則焉。今茲当三週忌辰。哀其遺稿將上梓。鈔録之際。吟誦之則風韻澹然。雅馴而不險。平易而不俚。亦足以髣髴其為人矣。同好之士。讀此而懷其人。則其風流韻事永伝不朽。亦何幸哉。

明治庚子十一月

劣弟川久保鉄三謹識⁴⁾

このように、まず修学面については、南汀は和歌と書画を好んだ風流人の父友善の遺風を受けて文墨を好み、青年期になってから藤澤東暎に儒学を修め、また呉北渚に就いて書法を学び、ともに得るところがあったという（下線①）。以下、友善と北渚の略伝を見ておこう。

住友友善〔文化7年（1810）—明治4年（1871）〕は住友南汀の父である⁵⁾。字は仲直、通称は甚次郎、号松谿。住友本家の住友友聞（九代目当主）の次子として生まれ、豊後町で両替・掛屋を営んだ。父友聞は文墨に親しみ、友善も早くから文学を好む。村田春門に師事し、和歌・書画に卓越した。儒学・国学から経済学まで幅広く学び、専門家の域を越えた学識と技量を持つ。歌人としても一流であった。家集に『友善詠草』がある。

呉北渚〔寛政10年（1798）—文久3年（1863）〕は書家・篆刻家である⁶⁾。名は篇策、字は成章、号は北渚。先祖は慶長年間に長崎に渡来した明人。のち大坂に移住して唐物屋を営んだが、北渚はその六代目に当たる。春田横塘（東暎の来坂を勧め、開塾を支援した人）に就いて経学・詩文を学び、のち篠崎小竹の梅花社に入門。篆刻は前川虚舟に教わった。篆刻の弟子に行徳玉江がおり、書の弟子に堀博・岡田竹窓・川上泊堂・南汀がいる。

次に職業面では、明治4年（1871）の廃藩置県後に世のありさまが一変し、家運が衰えたものの、南汀は相変わらず「雅懐」、すなわち高尚な気持ちを損なうことはなく、「簞瓢」、すなわち食べ物や飲み物が無くなったとしても平然としていたようである（下線②）。また趣味面については、かつて趣味を同じくする人々と謀って「由予吟社」という詩文結社を創めたが、その結社は大阪の文物の振興を目的としていたらしい（下線③）。なお交友面では、日頃敬服していた友人の日柳三舟が南汀の葬儀において「挽詩」、すなわち死者を弔うための詩を詠んだという（下線④）。以下、三舟の略伝を確認しておく。

4) 住友南汀『南汀遺稿』（川久保士龍、1900年）序3,4の頁。なお、旧漢字についてはすべて常用漢字に直した（以下、同様）。

5) 住友友善については、前掲「住友氏・蘇我氏略系図」、三善貞司編『大阪人物辞典』（清文堂出版、2000年）599,600頁を参照。

6) 呉北渚については、前掲「呉北渚の人と芸術」を参照。

日柳三舟〔天保10年（1839）—明治36年（1903）〕は教育者である⁷⁾。父の燕石は讃岐琴平（香川県）生まれの俠客で尊攘運動に参加、慶応元年（1865）高杉晋作を匿った罪で投獄され、のち出獄して会津戦争に従った。三舟は大阪府学務課長をつとめ、大阪師範学校長に就任。さらに盲啞学校愛育社を創設し、「浪華文会」において国定教科書の原型を作るなど教育面で大いに活躍した。川合清丸著、南岳・三舟評の『教法問答』（1883年）がある。阿倍野墓地にある三舟の墓誌銘は南岳の撰になるほか、その娘は石濱豊蔵（純太郎の父、第四代院主・藤澤黄坡の岳父）の後妻である。

2 南汀遺稿序と題南汀住友詞伯詩卷

本章では、藤澤南岳の序文と緒方南湫の題詩の考察を通して、南汀の人的・知的交流の実態にせまることとする。まず藤澤南岳によるⅡ「南汀遺稿序」を見ていこう。以下は、南汀と南岳との間に親密な学問上の関係があったことを示す史料である。

夫失意之徒。必有托情以逃也。逃于酒。逃于禪。逃于詩。逃于画者。自古而然。住友南汀亦逃于詩。而不必失意之徒。唯其幼也不幸。事不如志。嗜詩特甚。与田谷九橋来侍余講。講余必問詩而去。後為宗家所用。不可称失意。而嗜詩則依然。為三舟所愛。詩学大進。篇什亦富。故其歿也。介弟士龍編遺稿。問序于余。余乃謂曰。醉郷之徒。麴蘖之逃者。無言之可伝。則不及詩之可逃乎。雖然。南汀之逃。亦非期伝乎。酒与詩奚択。唯其逃之美。余輩所喜。豈不叙以伝之乎。

庚子十一月下浣

南岳藤澤恒識⁸⁾

このように、南岳は、「失意の徒」とは情に頼って現実から逃避する者のことで、彼らが酒・禪・詩・画に逃げるのは古より変わらないという。そして南汀も同じく詩に逃げたのだが、彼は必ずしも「失意の徒」とは言えず、ただ幼い頃に不幸があっただけだという。下線によると、南汀は詩を嗜むこと甚だしく、田谷九橋（明治31年に『近古史談講義』を著わして刊行した人）とともに南岳のもとにやって来て講義を聴講し、講義の後には必ず詩について質問したようで

7) 日柳三舟とその父燕石については、吾妻重二編著『泊園書院歴史資料集——泊園書院資料集成1——』（関西大学出版部、東西学術研究所資料集刊29-1、2010年）の前篇第15章「泊園人物列伝」、上田正昭ほか監修『講談社日本人名大辞典』（講談社、2001年）665頁。

8) 前掲『南汀遺稿』序1の頁。句点後の繰返し記号については、読みやすさを考慮してそれに該当する漢字に改めて表記した。

ある。その後南汀は住友本家に登用され、明らかに「失意の徒」でなくなったが、依然として詩を嗜むことは変わらなかった。また南汀は日柳三舟にその才能を愛されることにより、詩を学ぶこと大いに進み、その作品も豊富になった。こうして南汀の没後は異母弟の士龍がその遺稿を編むこととなる。士龍から序文の作成を依頼された南岳は、南汀が後世に自分の詩が伝わることを望んでいると考え、これを喜んで引き受けることにしたという。

次に緒方南湫によるⅢ「題南汀住友詞伯詩卷」を見ていこう。以下は、南汀と緒方南湫（緒方洪庵の後継者として適塾を主宰した人）との間に何らかの交際があったことを窺わせる史料である。

遮断世間名利縁。清風明月独超然。未曾一日廢吟味。放浪湖山四十年。
 間澹生涯日月寧。醉鄉詩國姓名馨。三年三度移家去。跡似坡翁挾勝亭。
 胸中無復一塵遮。詩格清敵自作家。坡句唯須代評語。淡雲籠月照梨花。

南湫緒方羽⁹⁾

緒方南湫〔天保5年（1834）—明治44年（1911）〕は、医師・教育者である¹⁰⁾。本姓は西、名は羽、号は南湫。豊前小倉（福岡県）生まれ、10歳の頃に泉州堺の医師吉雄竜沢の家に寄寓した。長じて豊後日田の広瀬淡窓・同旭荘に漢学を学び、ついで青木周弼・緒方洪庵について蘭学を修める。のち洪庵の養子となり、文久2年（1862）洪庵が幕府に招かれて江戸に赴くと適塾を継いで塾生を教授した。その後義兄の緒方惟準とともに緒方病院を設立して院主となる。晩年は南岳主宰の逍遥游吟社に出入りし、その著書『南湫詩稿』の第二集および第三集（1904・1912年）には南岳の序文が収められている。

上記の史料によると、南湫は南汀について、世間の名利にかかわる縁を断ち切って爽やかな風と曇りない月のようにただ一人超然としていたと評している。また南汀は一日として風流を吟味しない日はなく、湖や山を放浪すること四十年になるという。その無欲な生涯は日々寧らかで、酒を愛し詩を好んでそれぞれ独自の境地に至り、芳名は広く知られた。また年に三年に三度住まいを移して名高い旧跡を求める様はまるで蘇東坡のようであったらしい。南汀の心

9) 同上、序2頁。

10) 緒方南湫については、中山沃『緒方惟準伝——緒方家の人々とその周辺——』（思文閣出版、2012年）545～550頁、緒方南湫編著『南湫詩稿』第二集上・下（緒方南湫、1904年）、緒方正清編『南湫詩稿』第三集上・下（緒方正清、1912年）を参照。なお、『南湫詩稿』は第二集・第三集ともに関西大学総合図書館の泊園文庫に所蔵されている。

の内は塵一つ遮ることもせず寛容で、その詩の風格は清澄かつ荘厳なもので一家をなすまでになった。蘇東坡は「淡雲 月を籠めて梨花を照らす」(「寒食夜」)と詠っているが、この句こそ、南汀の詩を評するにふさわしいという。

3 南汀遺稿跋

本章では、日柳三舟によるV「南汀遺稿跋」の考察を通して、南汀の人的・知的交流の実態にせまることとしたい。以下は、遺稿を編むに当たって異母弟の土龍が取った行動、さらに当時の土龍と三舟との関係を明らかにする史料である。

著書上梓。以伝世。固非容易之業也。生前為猶難矣。況其歿後乎。子弟或不識字。附之蠹餐。自無以識。人將何伝哉。抑作為一篇詩文。撚断髭。嘔出肝。推敲隻字。搜羅群籍。千批百抹。後初成焉。既成而不自許。更質之所知。不可者焚之。可者存之。而日夕唸誦。以為自家至樂。噫嘻難矣哉。用心其如此。故平昔精神。一切罩籠阿堵之中。其人雖亡。其琴永存。謂之其終生史伝。亦非過言也。住友南汀。歿而無後。遺稿散佚。存亦無多。川久保土龍。有歎於此。歷問其生前知人。蒐輯久之成編。將以伝也。余太喜贊其舉。亦報前日知遇之厚也。土龍南汀異母弟。嘗讀書能詩。近入吾社。以読其遺韻特感其友于之篤。書其由。以為本集跋言。明治庚子晚秋。桃溪三舟日柳愬識¹¹⁾。

このように、三舟は、著書を出版することは本来容易なことではないとし、ましてやその没後の出版となればなおさら難しいという。また出版するに際しては、一篇の詩文を作るのに多くの気力と胆力を用い、一つの文字を推敲するのに多くの批判と校正を受ける必要があるとする。もし出版に辿り着いたとしても納得しなければ、再び有識者の判定を受け、不可であればこれを焼却し、可であればこれを保存するものだという。そうして世に出た詩文を詠うことにより、人はみずからの家の幸福を確認できるのである。三舟は、昔の精神とは著書の中に含まれているため、その著者が亡くなったとしてもその音色は永遠に存在するものだという。下線によると、南汀が没後してのち、その遺稿は散佚し、たとえ存在したとしても多くは無かった。異母弟の土龍はこれを嘆き、南汀の生前の知人を歴訪し、遺稿を収集することにより、ようやく出版するにいたった。三舟は生前の南汀の知遇が厚かったとして、喜んで土龍の義挙を助けた。土龍は書を読み詩に長じたが、最近になって三舟の詩社に入社し、その場で南汀が遺した

11) 前掲『南汀遺稿』跋の頁。

詩文を読んだという。

4 遺稿本文に見る交友関係

本章では、『南汀遺稿』の遺稿本文の考察を通して、南汀の交友関係の実態にせまることとする。遺稿本文のうち、以下の5つの題目および詩文は、南汀が泊園書院関係者および住友家の雇用経営者と学問的もしくは文化的な関係を取り結んでいたことを示す史料である。なお、それぞれの詩文は『南汀遺稿』の収録順に並べた。

[a] 移居偶成

卜宅城南古寺東。三年三处轉斯躬。鷄埒豚柵屋連屋。菜圃花園叢接叢。梅徑朝懷千里叟。
田結莊先生。桃溪夕慕三舟翁。日柳先生。我門不閉更妨入。山水明媚豈有窮¹²⁾。

[b] 和伊庭詞兄与王洋画伯同到馬山温泉過生瀨途上詩韻

暫脫風塵巾襪輕。竹溪松路碧流清。此中偏笑行人俗。無頼肩輿載夢行¹³⁾。

[c] 城南宗家別墅扁額広瀨遠叟氏所書。有梅圃桃園德有隣之句。余感賞有時。故步其韻賦七絕数首録一。

酒肆茶房处处開。遊峰痴蝶逐芳来。南園北圃兩風致。劉氏仙桃和靖梅¹⁴⁾。

[d] 保水広瀨翁嚮被叙従六位。今茲亦賜勲四等。因張祝筵。招住友家同僚。余亦得与賦蕪詩二章。聊寄祝意。于時明治壬辰十月七日也。

曾避非常厄。今成絶代功。勲章与高爵。併耀五洲中。
孫兒列膝前。寿福自然全。盛宴客皆醉。齊唱九如篇¹⁵⁾。

[e] 輓竹溪先生兼呈梅崖君

仙翁才学本超然。授業金城数十年。平日寛心不看怒。終身行徳足称賢。

12) 同上、27頁。

13) 同上、29頁。

14) 同上、30頁。

15) 同上、31頁。

朝吟残月梅清処。夕韻輕風竹秀辺。最是此間有腸断。聞君易簣入黄泉¹⁶⁾。

このように、[a] と [e] に施した下線部に注目すると、南汀は田結莊千里、日柳三舟、山本父子（竹溪・梅崖）といった泊園書院関係者、[b]・[c]・[d] に施した下線部に注目すると、伊庭貞剛と広瀬宰平といった住友家の雇用経営者との間に何らかの交際があったことがわかる。以下、三舟を除くそれぞれの交友の略伝を確認しておこう。

田結莊千里〔文化12年（1815）—明治29年（1896）〕は、漢学者・砲術家である¹⁷⁾。名は邦光、字は必香、号は千里。大坂の医者但馬天民の子として生まれ、幼くして大塩平八郎に師事、「大塩の乱」では連座して獄につながれた。一年後に釈放されたのち、篠崎小竹・広瀬旭莊らに入門、また東咳の知己を得る。のち長崎に遊学して蘭学を学び、ついで熊本の池部啓太のもとで西洋式砲術を修得した。翌年に大坂に帰り、以後は砲術教授として各地を巡って指導に当たる。その墓誌銘は南岳の撰になる。

山本竹溪〔文政7年（1824）—明治27年（1894）〕は、漢学者・教育者である¹⁸⁾。名は璉、号は竹溪。土佐佐川（高知県）の名教館教授・山本澹齋の次子で、大坂で東咳、江戸で安積良斎に学ぶ。帰郷して名教館の助教、のち土佐藩校の致道館の助教となった。その墓誌銘は南岳の撰になる。竹溪の子梅崖〔嘉永5年（1852）—昭和3年（1928）〕は漢学者・民権家である。名は憲、号は梅崖。岡山稚児新聞の主幹として活躍、大阪事件では檄文を書いて投獄された。出獄後は大阪で開いていた梅清処塾で漢学教授に専念する。明治21年（1888）南岳とともに儒学振興団体の「大成会」を結成した。

伊庭貞剛〔弘化4年（1847）—大正15年（1926）〕は実業家である¹⁹⁾。号は幽翁。近江（滋賀県）に生まれ、叔父の広瀬宰平の招きにより、明治12年（1879）司法官から住友に転じた。別子鉱業所支配人をへて明治33年（1900）二代住友総理事に就任、住友の財閥化の基礎を固める。大阪紡績や大阪商船の設立に関与するなど大阪財界でも活躍。明治37年（1904）総理事を鈴木

16) 同上、32,33頁。

17) 田結莊千里については、前掲『大阪人物辞典』713,714頁、武内博編著『日本洋学人名事典』（柏書房、1994年）243頁、平松勘治『長崎遊学者事典』（溪水社、1999年）162,163頁、泊園記念会編『泊園書院関係碑文調査報告書』（泊園記念会、2012年）52,53頁を参照。

18) 山本竹溪とその子梅崖については、前掲『講談社日本人名大辞典』1999頁、前掲『泊園書院関係碑文調査報告書』124,125頁、山本憲『梅崖先生年譜』（松村末吉、1931年）25頁、高知県人名事典編集委員会編『高知県人名事典』（高知市民図書館、1971年）398頁、宮本又次『町人社会の学芸と懐徳堂』（文献出版、1982年）22頁を参照。

19) 伊庭貞剛については、朝日新聞社編『朝日日本歴史人物事典』（朝日新聞社、1994年）187頁、瀬岡誠『近代住友の経営理念—企業者史的アプローチ—』（有斐閣、1998年）66,105頁を参照。

馬左也に譲って引退する。隠退後もみずからの書齋に大塩平八郎の書を掲げるなど、生涯にわたって大塩を崇敬し続けた。

広瀬宰平〔文政11年（1828）—大正3年（1914）〕は実業家である²⁰⁾。号は保水または遠図。近江（滋賀県）の医者の子として生まれ、11歳で住友経営の別子銅山勘場に奉公し、慶応元年（1865）同銅山の支配人となる。明治維新に際し同銅山の稼行権を新政府に認めさせ、フランス人技師を招いて近代化を敢行。明治10年（1877）住友家総理代人となり、のち住友家法を制定する。また五代友厚らと大阪商法会議所・大阪株式取引所・大阪製銅会社・大阪商船など幾多の会社を設立した。奉公時は周囲に同調せずに四書の註解書を精読、後年『鍊石余響』『偷閑樂事』（ともに漢詩集）を刊行する。

まず4名の泊園書院関係者については、梅崖を除き、その姓あるいは名に「先生」と付されているので、師弟関係があったかどうかはともかく、少なくとも南汀が学問上において尊敬する人々であったと考えられる。次に2名の住友家の雇用経営者については、伊庭のことを「詞兄」、すなわち詩文上の先輩として呼称するなど、文化面での敬意を示しており、また広瀬とのやりとりを見ても、広瀬が書いた扁額をめぐって南汀が詩文を詠み、広瀬の叙位に対する祝意として南汀が詩文を贈るなど、文化的なものが交際の基盤となっていたように思われる。これらの関係を見る限り、南汀は泊園書院と住友家の双方の人的ネットワークの接点に位置する人物であったといえるだろう。

5 南汀以後の住友と泊園

これまでの考察では、江戸期以来の豪商としての「住友家」、それも分家の住友南汀に焦点を当て、主に院主が住友・泊園双方の接点になっているものを取上げてきた。しかし、住友家の人々と泊園書院との間には、明治期以降の財閥としての「住友家」、それも本家や雇用経営者における「住友家」があり、かつ、門人が接点になっている事例も幾つか存在する。その代表例として、泊園門人の中川魚梁と今北洪川を取り上げ、彼らをめぐる人的・知的交流の実態を考察することとする。まず泊園門人の魚梁の略伝を見ておこう

中川魚梁〔安政4年（1857）—昭和15年（1940）〕は近代の茶匠²¹⁾。大阪の人。昭和前期の泊園同窓会のメンバー。はじめ画家を目指したが、23歳の時に四代目狩野宗朴に入門。狩野家は

20) 広瀬宰平については、前掲『朝日日本歴史人物事典』1394頁、前掲『近代住友の経営理念—企業者史的アプローチ—』11,12頁を参照。

21) 中川魚梁については、林屋辰三郎ほか編『角川茶道大事典』普及版（角川書店、2002年）1021頁、前掲『泊園書院歴史資料集—泊園書院資料集成1—』の後篇第3章『泊園同窓会名簿』（影印版）を参照。

大阪における裏千家の弟子家としての権威を保持していたが、宗朴の代をもって絶えた。そのため魚梁はこれを継承する立場となり、大阪交友会、大阪茶道研究会など多くの会に関係する。また灘の嘉納玉泉（八代目嘉納治郎右衛門・白鶴美術館創立者）、住友一翠軒（友親・住友本家十二代目当主）、住友春翠（友純・住友本家十五代目当主）など富豪の指導の任に当たった。

この魚梁については、宮本又次『大阪経済人と文化』（実教出版、1983年）の第7章「住友春翠と慶沢園と市立美術館」において、以下のように言及されている。なお、括弧内は筆者が適宜書き入れた。

住友春翠は野村徳七（野村財閥創始者）、小林一三（阪急グループ創始者）とならぶ大茶人であり、東京の益田孝（三井合名理事長）、団琢磨（同左）、原富太郎（横浜の生糸貿易商）、根津嘉一郎（根津財閥創始者）に匹敵する風流人であった。住友家は元来表千家で、徳大寺家は裏千家をとっていた。春翠も清風館（徳大寺家の別邸）にいたときから深津宗味から茶の手ほどきをうけ、大阪鰻谷で煎茶にこり、のち裏千家の中川魚梁に抹茶を学ぶ²²⁾。

魚梁に抹茶を学んだ茶人・住友春翠は南汀より二回りも年下であるが、財閥・住友家を語るうえで最も重要な人物である。なお、先に見たように、春翠は『南汀遺稿』の題字、すなわちI「菊思蘭情」の作成者でもある。以下、春翠の略伝を確認しておく。

住友春翠〔元治元年（1865）—昭和元（1926）〕は実業家である²³⁾。右大臣徳大寺公純の六男。京都生まれ。西園寺公望は次兄。明治25年（1892）住友家の養嗣子として入家し、翌年に住友家を相続し吉左衛門と改名、友純と称する。以来、住友家の家長として別子銅山を中心とする家業の発展に努め、大正10年（1921）住友総本店が合資会社となると社長に就任した。この間、事業は鉱山業から伸銅・鋳鋼・化学・銀行・倉庫・林業へと拡大していくが、春翠は住友の象徴的存在としての地位にあった。茶人のほか中国古銅器の収集家としても著名である。

このように、泊園門人の魚梁は財閥・住友家の象徴的存在として君臨した実業家・住友春翠の近代数寄者としての側面を支える存在であったといえるだろう。次に泊園門人の洪川の略伝を見ておこう。

今北洪川〔文化13年（1816）—明治25年（1892）〕は臨濟宗の僧侶²⁴⁾。摂津西成郡（大阪市）

22) 宮本又次『大阪経済人と文化』（実教出版、1983年）146頁。

23) 住友春翠については、前掲『朝日日本歴史人物事典』895頁を参照。

24) 今北洪川については、宮地正人ほか編『明治時代史大辞典』第一巻（吉川弘文館、2011年）189頁を参照。なお、洪川は住友家の雇用経営者のみならず泊園書院出身の実業家からも教えを乞われていた。洪川

生まれ。はじめ藤澤東咳に儒学を学ぶが、のちに京都相国寺の大拙承演について出家。文久2年(1862)排仏思想を批判して儒仏一致を説く『禅海一瀾』を著わした。明治15年(1882)年臨濟宗円覚寺派初代管長に就任する。その思想は儒仏二教一致であり、キリスト教を強く批判するものであった。門下には釈宗演や宮路宗海をはじめ、居士に山岡鉄舟・鳥尾得庵(小弥太)・秋月毅堂(左都夫)・伊達千広などがある。

この洪川については、宮本又郎・作道洋太郎編『住友の経営史的研究』の第10章「近代住友の経営理念」(執筆者:瀬岡誠)において、以下のように言及されている。なお、括弧内の文言は筆者が適宜書き入れた。ルビは原文のままである。

(鈴木)馬左也が(今北)洪川の弟子となったのは、(兄の秋月)左都夫が法律学校を出て(ベルギーとドイツに)留学するまでのわずか一ヶ月の間である。もし左都夫がこのとき馬左也を洪川に紹介しなかったら、その後の馬左也の運命も、したがって住友も、異なった道をたどったかもしれない。…今北洪川が鈴木馬左也の経営理念と企業者活動に大きな影響を与えるにいたった要因は、洪川が革新的な宗教運動の担い手であったことに求められる。そして洪川の革新性は、シンクレチズム総合主義を基盤としていた。…(洪川と親交のあった)川合清丸は、(山岡)鉄舟や(鳥尾)得庵が設立した「大日本国教大道社」の主筆であった。かれは、『大道叢誌』によって、「神儒仏を打して一丸としたシンクレチズム総合主義」をとらえた。…洪川と心学や大道社との深い関係は注目してよい。近代住友の経営理念は、伊庭(貞剛)により確立され、鈴木馬左也を経て、小倉正恆においてその頂点に達するが、かれらの経営理念の共通点に、この総合主義があった²⁵⁾。

このように、泊園門人の洪川は、先述した広瀬宰平(初代住友総理事)と伊庭貞剛(第二代住友総理事)の後継者に当たる鈴木馬左也(第三代住友総理事)の経営理念と企業者活動に大きな影響を与えた人物であったことがわかる。以下、鈴木馬左也の略伝も確認したい。

鈴木馬左也〔文久元年(1861)―大正11年(1922)〕は実業家である²⁶⁾。日向高鍋(宮崎県)の家老秋月種節の四男。明治20年(1887)帝大法科大学を卒業後、内務省に入省。明治29年

と本多政以との関係については、前掲『泊園書院の明治維新―政策者と企業家たち―』の第Ⅱ部第1章「男爵本多政以の思想と事業―泊園学と禅宗―」を参照のこと。洪川は泊園書院が標榜する「徂徠学」が「心性の事」について「浅薄」である点に問題意識を持っていた。

25) 宮本又郎・作道洋太郎編『住友の経営史的研究』407, 408, 412, 413頁。

26) 鈴木馬左也については、前掲『朝日本歴史人物事典』889頁を参照。

(1896) 求めにより辞官して住友本店に入り副支配人となる。明治37年(1904)伊庭貞剛のあとを承けて総理事に就任。以来、家長の住友春翠を補佐して住友の全事業を統轄した。事業の多角化とともに組織の近代化を推進する。人材育成にも熱心で、官界から人材を迎え入れるとともに、大学・専門学校新卒者の採用を積極化し、独身寮の整備や参禅修行を通した社員の精神教育にも尽力する。

なお、瀬岡氏が住友家の経営理念と洪川の宗教観との共通点に言及した際、洪川の準抛集團の一人として川合清丸〔嘉永元年(1848)―大正6年(1917)〕(泊園門人)に着目しつつ、洪川と清丸がともに唱えた「総合主義」をそのキーワードとして挙げていることは注目すべきだろう。なぜなら、これは住友家の雇用経営者たちと泊園書院出身の宗教家たちが期せずして似通った宗教上の課題の解決を試みていたことの現れだと思われるからである。

おわりに

本稿では、筆者の研究課題である漢学と実業界との関係性を解明するに当たり、近世・近代の大阪経済界の巨頭・住友家の人々に注目し、彼らと泊園書院との関わりを考察してきた。考察に当たって取り上げた資料は、住友家の分家の当主住友南汀の著作『南汀遺稿』である。南汀は幕末期の大坂で松江藩と篠山藩の用達をつとめ、維新期の廃藩置県によって没落するに至ったが、その後住友本家に登用・支援されたため、みずからの隠居所を捨てるなど優雅な晩年を過ごすことができた人物である。この南汀の三周忌に当たって異母弟の川久保士龍が刊行したものが同書である。以下、同書から読み取れた南汀の人物像および人的・知的交流の実態を、泊園書院の院主・門人との関係に着目しつつ概観する。

まず南汀の人物像であるが、小伝によると、南汀は住友本家の次子として生まれた父友善の文化的素養を引き継ぎ、青年期になって東暎に儒学を学ぶこととなる。また南汀は呉北渚に書法を学んでいるが、この北渚という人物は東暎友人の春田横塘に儒学を学んでいる。また南汀は南岳友人の日柳三舟を日頃敬服していたという。南汀は泊園人脈につらなる人々との交流を通してその素養を高めていたのである。またその交流から得た高尚な気持ちとは、世俗の動向によって左右されるものでなかった。南汀の文化に対する強い気持ちは、その結成に参与した「由予吟社」の目標においても読み取れる。

次に南汀の人的・知的交流の実態である。序文・題詩・跋文によると、南汀はその作者である藤澤南岳・緒方南湫・日柳三舟と親密な関係にあったと推測される。なお、本論で見たように、南湫と三舟はその著作や墓誌銘、家族構成から藤澤家との親密な関係が確認できるなど、彼らも泊園人脈につらなる人々であった。まず南岳との関係については、南汀は『近古史談講

義』の著者である田谷九橋とともに南岳に学び、とくに詩文の教えを求めていた。南岳の人物評からは、南汀が幼少期の不幸（庶子として出生か）をきっかけとして詩文にのめり込んだ様子が窺える。次に南湫との関係であるが、両者の交際ぶりは直接には窺えない。ただ、その描写に注目すると、南湫から見た南汀像として「世俗から超越した詩人・南汀」というものが見出せる。最後に三舟との関係については、南岳の序文によると、三舟は南汀の才能を見出し、南汀に詩を教えた人物として描かれていたが、当人の跋文には、南汀の異母弟・士龍についての記述が多かった。それによると、南汀の遺稿は士龍の働きによって初めて刊行されるに至ったが、その背景には士龍と三舟が共有する詩文に対する情熱があったことがわかる。

遺稿本文に見る交友関係も見ておこう。ここでも南汀の泊園人脈との強い親近性が窺える。なぜなら、遺稿本文に登場した田結莊千里、日柳三舟、山本父子（竹溪・梅崖）は、共通して東暎と師弟関係ないし連携関係を結び、かつ、その墓誌銘が南岳の撰文による人々だからである。これに対し、南汀の住友人脈を見ると、広瀬宰平（初代住友総理事人）・伊庭貞剛（第二代住友総理事）など近代の住友家の発展を支えた雇用経営者が見られるが、彼らも泊園人脈に準ずるほどの漢学の素養を持つ人々であったことがわかる。

では、江戸期以来の豪商・住友家と泊園書院との関係を象徴する南汀のほか、先に見たような雇用経営者もしくは住友本家と泊園書院との関わり、それも明治期以降の財閥・住友家と泊園書院との関係を象徴する門人は存在したのだろうか。そこで「南汀以後の住友と泊園」と題して泊園門人の中川魚梁と今北洪川に注目した。まず魚梁は、はじめ画家を目指したものの、途中から茶の道へと進んだ門人である。また昭和前期に至っても同窓会に参加するなど泊園書院に愛着を持った人であった。この魚梁の教えを受けたのが、財閥・住友家の象徴的存在であった住友春翠である。近代の実業家の一部は、近代数寄者として茶に加えて詩・書・画など東洋の文人趣味を嗜んだ。住友本家の当主春翠もまさにその一人であったが、その文化的活動を魚梁が支えていたわけである。一方の洪川は、はじめ東暎に儒学を学んだものの、それに飽き足らず臨済禅へと進んだ門人である。またキリスト教を批判し儒仏一致を説くなど独特の宗教観を持った人である。この洪川の教えを受けたのが、春翠を補佐しつつ、財閥・住友の事業の多角化および組織の近代化、さらに人材育成を推進した鈴木馬左也（第三代住友総理事）である。先述した伊庭に始まり、この鈴木を中間点として形成されていく住友の経営理念には、東アジアの宗教の一体化、すなわち「総合主義」が底流に流れていた。この住友家の雇用経営者による「総合主義」への帰依、とりわけ鈴木の場合においては、洪川が果たした役割は大きかったといえる。また「総合主義」に関しては、洪川のみならず川合清丸というもう一人の泊園書院出身の宗教家が説いていた点は注目すべきだろう。なぜなら、期せずして彼らは住友家の

雇用経営者たちと宗教上の問題意識を共有していたからである。

以上のように、『南汀遺稿』の考察を中心に、江戸期以来の豪商・住友家と明治期以降の財閥・住友家をめぐる人々が泊園書院の院主および門人とどう関わるのかについて概観してきた。近世・近代移行期を通観することにより、新たに見えてきたのは次の通りである。

まず豪商としての住友家の場合、泊園書院の学芸は「詩文への逃避」といった個人的な事業をきっかけとして求められたようである。それゆえ、住友家全体の運営により切迫感のある本家というよりもむしろ分家、しかも庶子として生まれた南汀のような人々が学びに来ていたのかもしれない。またこのケースでは、泊園書院に学ぶことを契機として詩文を趣味とする泊園人脈の一端に加わるようになったようである。この書院を中心とする人脈は、漢詩人以外の側面を持つ人々（たとえば、医家・緒方家、尊攘家・日柳家、民権家・山本家など）によって構成されていた。南汀自身も実業家という側面を持つ点において例外ではない。

一方財閥としての住友家の場合、泊園書院の学芸は経営の問題と結びつきながら求められていったと考えられる。それはその接点が経営に切迫感のある本家と雇用経営者にあったことに示される。魚梁が泊園書院で得た教養を踏まえつつ住友本家に茶を教えたことは、住友本家の重要な仕事であった社交において重要な役割を果たしたことだろう。近代の数寄者になることは、当時の財閥創始者らと立ち回るうえで有利に働いたと思われる。また洪川の宗教観、すなわち「総合主義」は、いうまでもなく住友家の雇用経営者たちにとって経営に関わるものと理解されてきた。これはもはや詩や茶という趣味の領域から離れて思想の問題となるわけだが、当時の厳しい世界情勢のもと産業人としての人格とそれを基礎とした行動を如何に形作っていくのか、その問いに泊園門人が有益な答えを示したのである。

このように、近世・近代移行期を通観してみると、泊園書院の学芸は時代によってその役割を異にしつつも、「住友家」を構成する多様な人々の意識と行動に少なからず影響を与えてきたことがわかる。本稿では近世・近代の大阪経済界を代表する「住友家」を見てきたが、はじめに掲げた「漢学と実業界の関わり」という本来の命題を考えた場合、より規模の小さい商家や個々の実業家の事例についても、幅広く検討する必要があるだろう。

〔付記〕本稿は、科学研究費助成事業若手研究 (B)「大阪漢学と近代企業家に関する研究——泊園書院と重建懷徳堂を中心として」(課題番号17K18250、横山俊一郎研究代表)における成果の一部である。

